



TITLE:

明治・大正期の地方都市における 電気軌道事業と都市形成に関する 研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

岩本, 一将

CITATION:

岩本, 一将. 明治・大正期の地方都市における電気軌道事業と都市形成に関する研究. 京都大学, 2019, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21740>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（工学）	氏名	岩本 一将
論文題目	明治・大正期の地方都市における電気軌道事業と都市形成に関する研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、多くの一次史料の発見とその精緻な分析に基づいて、明治・大正期の地方都市における電気軌道建設事業の歴史的な過程を、とくにその都市計画上の公益性、事業形態と経営戦略などの視点から明らかにし、その都市の空間形成と事業に関わる主な事業家や行政などの関係主体の都市づくりの構想に与えた影響を解明した。本論文は6章構成となっており、各章の内容および成果は以下の通りである。</p> <p>第1章は序論であり、本研究の背景と目的、手法、位置づけを示した。</p> <p>第2章では、軌道事業の黎明期である明治時代において、全国に電気軌道の建設事業を展開した才賀藤吉に着目し、事業の特徴を整理した。才賀に関わった12の電気軌道事業の中で、会社の発起時もしくは創立時から関わった会社は5社であった。才賀が主導した電気軌道は、輸送力が高く、衛生上の問題も少ないことから、都市の中心部に軌道が敷設されることが示された。最初に出資した電気軌道事業において、電気軌道の敷設と都市形成の関係性を明示するために、市の中心部分を通る路線が敷設された和歌山水力電気軌道（和歌山市）と、最長の路線を有し、市内線と郊外線の2本の路線を有する美濃電気軌道（岐阜市）を個別事例として抽出した。</p> <p>第3章では、電気軌道事業に取り組んだ先駆的事例である近代の和歌山に着目し、水力発電と電気軌道事業が密接に関連するという連続的な視点を提示し、事業の関係主体がどのような理念や事業指針をもってインフラ整備を実施し、同時に公共整備としての公益の確保を実現したのかを明らかにした。</p> <p>はじめに、明治30年代の和歌山市では、「工業都市」の方針が市会を中心として考えられていたことを示した。同時期に、大阪の旅客を和歌浦へ円滑に運ぶことを狙う南海鉄道と、才賀藤吉による支援のもと、地元実業家らによるインフラ整備を実施することを狙う和歌山水電は、共に日高川の水力発電事業を出願し、事業実施の権利を巡る確執が生じた。この確執に際して、事業認可の実質的な裁量を持つ県知事は、市長と共に仲裁に取り組んだ。その結果、才賀藤吉と和歌山市の地元実業家が事業実施の権利を得て、水力発電事業と電気軌道事業を実現させた。これらのことから、新たな交通インフラを市内に敷設し、安価な電力を手に入れたことで、和歌山市は市内の工場増加や和歌浦、和歌山城公園の整備など、観光や工業を方針とする構想を実現させたことが解明された。</p> <p>第4章では、明治・大正期の岐阜で行われた電気軌道および同時並行で進んでいた軽便鉄道事業やその他の開発事業も分析した上で、それぞれの事業路線が敷設される意図を明らかにした。</p> <p>上有知町有志者と才賀藤吉の主導により設立された美濃電気軌道は、岐阜市の市内線と岐阜市-上有知町を繋ぐ郊外線がそれぞれ異なる意図をもって計画、開業された。</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	岩本 一将
<p>紙商人であった上有知町有志らは、国鉄岐阜駅へと繋がる郊外線を敷設し、和紙産業の販路確保を目的とした物流動線を形成することを意図した。</p> <p>また、市内線に関しては、当時の岐阜市では、観光を軸として都市開発が進められており、市の有志が稲葉山一帯を一大遊園地とすることを計画した。電気軌道敷設とともに実現した市区改正事業を通して得た美濃電気軌道の寄付金により、この開発計画の第一歩たる工事と位置付けられた岐阜公園の改修に取り組むことに成功したことを示した。以上のことから、近代岐阜市で構想されていた都市計画を実現する上で、電気軌道事業が重要な位置付けを担っていたことが解明された。</p> <p>第 5 章では、前章までの研究成果より、近代都市の物理的かつ経済的な骨格を作り上げる役割を果たしたと考えられる地方中核都市の電気軌道事業に着目し、「第 1 期計画路線」を対象として「都市構造/事業形態/経営戦略」の 3 点から考察し、電気軌道事業の特徴を明らかにした。</p> <p>その結果、分析対象の 16 事例は全てが民営によって敷設された。電気軌道開業以前の人口規模と郊外線の有無を分析した結果、福岡市の約 8.2 万人を境として、それ以上の人口規模を有する地方中核都市においては市内線のみで開業しており、対象都市の人口規模と電気軌道の輸送規模が強く関係していたことを明らかにした。</p> <p>また、沿線施設を分析した結果、港や鉄道といった広域な輸送網と、官庁施設の位置する中心市街地を結ぶことが多くの事例で共通する路線の基本形であり、そこから「市内完結」、「郊外遊覧地接続」、「都鄙連絡」の 3 つの傾向を見出すことができた。また、前述の基本形に該当しない「特殊形」も 3 事例が確認された。</p> <p>これらの事例は、事業内容や軌道の沿線施設は各地方中核都市の輸送需要に対応しているが、本論文の分析によって、地方中核都市の電気軌道は鉄道や港などの広域輸送網と中心市街地をつなぐ新たな交通動線を創出した点が共通することがわかった。中でも「都鄙連絡」に分類された事例は、郊外と接続して娯楽施設や住宅を開発して旅客利用を促す事例や、郊外の特産品を運ぶための物流動線としての機能が求められた事例など、より地域の状況を反映した意図を把握することができた。</p> <p>第 6 章は結論であり、本研究で得られた成果をまとめ、今後の課題や展望について整理した。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、多くの一次史料を主とした文献調査に基づき、明治・大正期の地方都市における電気軌道建設の過程を、とくにその都市計画上の公益性、事業形態と経営戦略などの視点から明らかにし、その都市の空間形成と関係主体の都市づくりの構想に与えた影響を解明している。主な成果は次の通りである。

(1) 明治期の和歌山市における電気軌道敷設に基づく近代都市の形成と工業化

電気軌道の先駆的な事例である和歌山市における敷設事業は、才賀藤吉が地元実業家と共に構想を主導し、都市形成のビジョンと持続的な経営によって実現した過程を明らかにした。すなわち、電気軌道の動力の源であり、かつ生活や工業の動力源になる水力発電事業が同時に整備され、この発電事業により市内と周辺市町村の工業化が急速に推進された。また、市中心部の動線軸に位置した電気軌道の実現は、工場の増加や公園整備、遊覧施設の開発を促し、工業と観光を主軸とする近代都市が形成された。民間の電気軌道事業でありながら、都市形成の展開を当初から想定し、公益を位置付けた固有の電気軌道事業の構想と内容が解明された。

(2) 明治期の岐阜における電気軌道を契機とした市区改正事業

広域な軌道網を有する岐阜市では、まず郊外線に関して、郊外の特産品を運ぶ物流動線としての機能が重要視されたことを明らかにした。そして市内線は、電気軌道の建設に合わせて岐阜市の市区改正事業が計画され、両事業が実現する背景には、観光を軸とした都市構想が考えられており、電気軌道の敷設は構想を実現する上で重要な位置付けであったことを解明した。

(3) 明治・大正期の地方都市における都市形成と電気軌道事業

個別事例の成果を受けて、大正中期までに電気軌道が建設された地方 16 都市に着目し、電気軌道の土木事業が、近世から近代の都市へと移り変わる過程において新たな動線を創出し、且つ各都市の人口規模に応じた輸送規模を有し、郊外との連絡や輸送内容等については、各都市の状況に依る固有の方法がとられたことを、網羅的な分析に基づいて明らかにした。

上記の通り、本論文は、明治・大正期の地方都市における電気軌道事業の建設過程について、多くの一次史料を用いて精緻に分析し、電気軌道事業が、その都市の内外の輸送体系を整え、産業と経済を活性化させ、市街地改造による近代地方都市の骨格を形成する原動力となったことを解明した。土木史と都市計画の視点を融合し、多くの文献資料から困難な現象解明を行った研究として学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 31 年 2 月 22 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。